

ツキノワのまき

5. 赤い花の悪ま

山々の雪がとけると……………

春を知らせる足音のように、足がら山の谷川に雪どけの水が、ごうごう流れて——やがて、せせらぎの音ものどかに、さわやかな緑の風が吹き始めました。

そして、あたたかい光をあびて、まず、まっ先に、ゆきやなぎが芽を吹き、次につばきの花がほころんで、もくれんの花もいいにおいをただよわせました。

川原のつつみに、つくしんぼうが頭を出すころには、若草も緑にもえて、ゆらゆらかげろうが立ちのぼっていました。

またそのころになると……………

金太郎が、母と一しょに苦労してたがやした畑にも、黄色い毛せんをしきつめたように美しい菜の花が、丘一面にさきそろって——黄ちょうやもん白ちょうが、春のまいをまって、ひらひらと花から花へ飛び回り、そして、みつばちや花ばちも、花畑の仕事に一生けん命精を出して、せっせと働いていました。

それから、また、しばらくたつと、丘の南がわの、たちばなの木にいっぱい白い花が咲いて、その木の根が持ち上げている地面の、デコボコ道で大勢の山ありが、ぼつぼつ春の仕事を始めようと、みんなで助け合って、畑の肥料にやった川魚のほね切れを……………

「えっさ、えっさ——」

と、かつぎ上げて、自分達のすへ運んでいました。

また、その少し前ごろから、冬眠のゆめから覚めた山々の動物が、長い間の空腹をみたそうとえさをあさりますが、なかでもむささびは、山一番の食いしんぼうで、なんでもかんでもコリコリ、コリコリかじります。

そして、夜になると、林の向こうから……………

「カツカツカツカツカツカツカーラッ——」

と、ものすごいさけびを続けて、山みんなをおそれさせます。

こうしたことが、しばらく続いて……………

夏が、すぐ、目の前へやって来ると、川原やつつみの石あなから、一番ねぼ助のへびやとかげが、やっとな長い冬のゆめから目を覚ましてはい出し、湯気を立ててわき出している温泉の周囲へ、みんなぞろぞろはい寄って行きました。

また、くぬぎ林の中では、からからぬけ出したばかりの、かぶと虫やくわがたが、からだの三分の一もあろうと言う大きなつのやはさみで、くぬぎの木の皮をむき取って、皮と身の間から、チュウチュウまそうに、くぬぎのしるをすすっていました。

やがて、夏が来て……………

つつみの石あなからはい出した石がめが、川原の水たまりで泳ごうと思いました。が、今年は、どうしたのか、川原に水たまりが少しもありません。

それは、とのさまがえるが、

「ゲロゲロ、クェクェ——」

と、歌い出すつゆの初めごろから、まだ一てきの雨も降らなかったためです。

で、夏の初めがやって来ると、谷川の流れさえ、だんだんかたまって、深い滝つぼの他には、岩間に少し水だまりが、ところどころ残っているだけでありました。そして、その残り少ない水たまりの中で、げんごろうやみずすましが心細そうに、川魚の子ども達を追っかけ回していました。

そして、また、谷川の流れも、日に日に細まって、とうとうかれ上ってしまいました。しかし、深いふちを作っている滝つぼだけは、いく日晴天が続いても、まんまんと青い水をたたえて、すずしい山風にさざ波を立てて、金太郎親子と、野じかの家族の命をつなぐにはじゅう分な水がさをたくわえていました。

こうして峠は、からつゆのままあちらこちらの松林で……………

「ギーギー、——」

はるせみが、やかましく鳴き出しました。

それで、金太郎は——ここでさえ、飲み水が、滝つぼだけになってしまったから、野うさぎのすや、くまの岩屋のあるもっと川上ではどうなっていることだろうかと、子うさぎのヤトや、子ぐまのツキノワのことが心配でなりません。

と言って毎日、畑の水やり仕事がいそがしいので、川上まで行ってやることさえできません。

話は、変って

子うさぎのヤトは、去年の秋、くりの実を取入れてから半年目で、もうりっぱな野うさぎに成長していました。

そして、この日照り続きで、こちらがわの、日かげの少ない岸では、若草がおおかた、かたてしまったので、弟うさぎ達を連れて、ひ上った谷間を渡って、みんなで向う岸のひのき山のふもとで、毎日のようによもぎつみや、若草がりの仕事にはげんでいました。

だが、ツキノワは、まだ子ぐまです。去年の冬には、せ中で雪すべりすることも出来るようになっていましたが、小じかのジロツポと同じように、半年や一年では、おとなぐまにはなれません。

しかし、ツキノワも、冬ごもりがすんで春になって岩屋のあなをふさいでおいた雪のかべをこわして出て来ると、しばらくはやせていましたが、むさぼるように食物を食べるごとに、ぐんぐん急にからだも大きくなって——谷川をさか上って来るやまめやいわなを、自分でつかみ取れるようになっていました。

また、太ったからだでも、谷間の岩から岩を飛び回るかじかさえ、す早く取りおさえることが出来ました。そして、また、日本の谷川だけに住んでいると言われるさんしょうおのはんざきと組打ちして、これをとらえたこともありました。

でも、雨が降らなくなってからは、こと谷川の上流には、いつの間にか、やまめもいわなも、どこへ行ってしまったのか、すがたを見せなくなってしまいました。そして、岩の間のさわがにも、水気のない岩あなのおくで……

「ブッフッ——」

毎日、不平のあわを吹き立てて、日当たりの強いあなの外へは、いっこうに出て来そうもありません。また、谷川第一の働き手と言われているかわうそも、川水が少なくなってからは、川仕事が出来ないで、川下の滝つぼまで下って、かせぎ場を変えてしまいました。

……で、ツキノワも川仕事をやめて、峠の北がわの谷へ山仕事に出かけました。そして、山たにしを拾い集めようと、深い落葉をかきのけると、いくら日照りが続いても、この北向きの谷は、しめり気が多いので、おもしろいほど、ころころと山たにしが出て来ました。

で、ツキノワは、喜んで……

「あったあった——これだけあればきょう一日は、おなか一ぱいごち走になれる——」

と、む中になって落葉をかきのけては、ころころ山たにしをころがして、さて、仕事がすんで……

「さあ、ごち走になるか——」

小声でつぶやきながらツキノワが、うしろをふり返って見ると、せっ角あせを流してころがせた山たにしを、いつの間に来たのか、のりすが一羽、ツキノワには無だんでかたっぽしから山たにしを失けいしている……

「この、ふとゞきのりすめ！」

と、飛びかかって行くと、のりすは、さっと飛びのいて……

「すみません、すみません、ごち走になってしまいましたよ——」

そうわびて、気まり悪そうに赤みがかった茶色のつばさを、バタバタさせて飛んで行きました。

すると、ツキノワは、急になんとか空腹を覚えて、のりすに食われた山たにしのことが残念で残念でなりません。それで、元気がなくなり、もう帰えろうと、谷間のしだの葉をおし分けて、がけをよじ登ろうとすると、がけくずれの、日当たりのいい地面の上に、大ありの通っている道すじを見つけました。

「しめ、しめ、これで助かった——」

山たにしよりも大好きな大ありを発見したツキノワは、たらたらよだれを流しながら、ここが、ありの道の終点だとねらいをつけて、その地面の上を、ガサゴソ前足でほり返すと深い地面の下から大きなありが、四、五ひきあわてて飛び出しました。

そこで、その上を、ぐっと力を入れてふみつけると、今度は、大勢の大ありが足の下からぞろぞろはい出し、ツキノワの前足からみんなゴソゴソからだへよじ登って来ました。

くまは、大ありをなめることが大好きです。それは、ありが、くまの健康に欠かすことの出来ない塩の代りになるからです。

それで、ツキノワも、自分のからだの毛の中へ口先をつっこんで、ペロペロうまそうに大ありをなめました。

が、それでも、大ありが、毛のおく深くまでもぐりこんで、ガサガサ、ゴソゴソ歩き回るので、からだ中が、かゆくてたまりません。

こまりぬいたツキノワは、腹の方なら、前足でもかけますが、せ中の方は、後足をきように後へ回してかいたぐらいでは、とつてもかゆみがとまりません。

で、太い松の木の前に、後足だけで人間のように立って、ひぢを曲げたりのぼしたり、ガサガサした松のみきにせ中をこすりつけて……

「おちに、……—」

しばらく体操を続けていましたが、それでも、ますますかゆくになるので、母ぐまに大ありをなめてもらおうと思ってころげようように急いで岩屋へ帰ると……

くまの岩屋では、大さわぎが始まっていました。

と、言うのは、去年の暮れから、とうみんのすきなやまねの兄弟が、寒い冬をこすために岩屋のすみで冬ごもりをさせてもらっていましたが、やまねの兄弟をねらって飛びこんで来た山いたちのために、最前から追っかけ回されて、兄弟は、せ中に黒い太いたてじまのある小さいからだをひるがえして、岩屋の中の、岩かどから岩かどを、青くなって逃げ回っていたのです。

そうすると、お客のやまねを助けるにも、父ぐまや母ぐまの重いからだでは、これも、岩かどづたいに追っかける山いたちを、取りおさえることが出来ません。

で、父ぐまは、プンプンおこりながら下の方から、大きな声を張り上げて、

「こりゃ！この岩屋のお客を、どうしようと言うのだ—」

と、どなりつけました。

すると、その声が、岩屋中で鳴り返って、グワングワンやかましくひびきます。

母ぐまも、ハラハラして、

「私達の岩屋で、そんならんぼうしてはなりません—」

母ぐまらしく、やさしく言ったつもりでも、声に力がこもっていたので、また、岩屋中いっぱいに広がってグワングワン大きくひびきます。

ちょうど、その時、ツキノワが帰ってきました。そして、このあり様を見ると

「山いたち！止めないか—止めないと、僕があい手になるぞ—」

そう言ったと思ったら、そこは、子ぐまの身軽さで、一番高い岩かどの上へよじ登って行きました。そして、その下を追い回る山いたちの上から、体当たりする覚ごを決めました。

それは、どうしても、やまねの兄弟を助けてやらねば、くまの岩屋の名よにかかわると思ったからです。

で、山いたちが、ツキノワのま下を通ろうとした時、

「今だっ—」

とばかり、ドスンとからだぐるみ飛び下りて、前足で山いたちの、金茶色をした長いしっぽをぐつと取りおさえました。

が、山いたちは、す早くしっぽを細めると、ツキノワの前足からすりりとぬけて、かなわないと思ったのか、

「ここまで、おいで—」

そう言い残すと、サッと、岩屋の外へ飛び出して、短い足でも回転が早いので、すごい速力で逃げて行きました。

「しまった—」

と、思ったツキノワは、

「待て！逃がさないぞ—」

こらしめのために、後から追っかけて行くと、山いたちは、あわてふためいて、すぐ川ばたの、がけの石あなへ、自分の身長十倍以上もはなれたこちらから、サッサッサッと、三段飛びで飛びこんでしまいました。

そして、すぐ、あなの中から、こちらをのぞいて……………

「あま酒進上——」

と、ツキノワをばかにしたように、からかいました。

が、子ぐまでも、ツキノワのからだは、小さい石あなへ飛びこむことが出来ません。

それで、前足を石あなへさしこんで、とらえてやろうと思いましたが、かえって山いたちに足をかまれる危けんがあると思って、あなの前から……………

「うう——」

と、一声うなると、山いたちが後ずさりしたので、そーっと近づいて、あなの中をのぞいて見て……………

「おやっ、へびのすだ。うようよしまへびがいるよ——」

と、山いたちにも、知らせてやるようにつぶやきました。

で、初めて気づいたように山いたちが、おくの方へふり向くと……………

このあなに住んでいるしまへびの一族が、七、八びきも集まって、長いからだでとぐろを巻いたまま、山いたちを、ただ、ひとのみにのんでやろうと、ぎらぎら目を光らせて、こちらをにらみつけていました。

それで、山いたちは、もうツキノワをからかってはいられません。そして、へびなんぞにのまれてたまるものかと、自分の方から先に、しまへび達のとぐろをかき散らしてやろうと思って、首を低くして白いきばをむき出し、しりを高く上げてしっぽをふくらし、ポンポン左右へはねて、へびに飛びつかれないように用心しながら、するどい足のつめをとがらせて、とく意のこうげき法で、じりじりせまって行きました。

だが、しまへび達は、落ちついて、するするっととぐろをとくと、みんな一しょに、ぬうーとかま首をもたげ、まっ赤な口を、さけんばかりに大きく開いて……………

「だれだ！昼ねのじゃまするのは、頭から、そっくりのんでしまうぞ——」

そう言って、ペロペロしたなめずりするおそろしさに、山いたちは、こりゃ、自分のはや、つめではかなわぬと思って、急に逃げごしになってしまいましたが、せまいあなの中では、はずみをつける広さもないし、そのうえ、外にはツキノワが、がん張っているので、飛び出すことが出来ません。

そのうち、しまへびの家族達が、うす青く茶色に光ったうろこの、長いからだをニョロニョロうねらせて、だんだん近づき、気持の悪いしっぽが、ちょうど目でもあるように、あちらからもこちらからも巻きつこうと、山いたちをねらっています。

で、本気に逃げごしになってしまった山いたちは、そうなると、たゞもう、おそろしくておそろしくて、カチカチはを鳴らしながら、あなの外のジロツポへ……………

「助けて下さい——もう、けっして、やまねを追い回すようなことはしませんから、どうぞ助けて下さい——」

と、そう言って、手を合わさんばかりにして頼みました。

こうなると、ツキノワは——いたずら者の山いたちでも、同じけものな仲間です。間ちがいの起こらないうちに、早く助けてやろうと思って……………

「じゃア、二度と、岩屋のお客に失礼するようなことはしないな——」

と、念をおしてから、石がきを……

「うん、うん——」 かけ声に合わして、力一ぱいおしてみました。が、どうしたことか、向こうへは、少しも動こうとしません。

それで、今度は、右前足をあなの中に回して、左前足で石かどをかかえ、後の両足で石がきを、ぐっとふんばって……

「うーん！」

と、力を入れてこちらへ引くと、かけ石が、ゴクゴクと動き出したと思ったら、ふいに、こちらへ、すーっとぬけました。

が、そのひょうしに……

「うあ——」

ツキノワは、大きな石をかかえたまま、ころころうしろへでんぐり返ってくまざさの上をすべって、ずうっと下の土あなへ、ころげ落ちてしまいました。

そして、ツキノワが……

「おやっ、ささぐまのすだ——」

と、気づいて、よく見回すと、そこは、ささぐまが足のつめで、地面を横ななめに深くほって、自分達で作り上げた土あなです。が、もぐらの土あなのように、年がら年中、日の目を見ないような不衛生なすではありませんでした。そして、そのうえ、青々としたささの葉までしきつめて、住み心地のよさそなすでありました。

で、ツキノワは、すのおくの方へ……

「今日は、だれかいませんか——」

と呼んでみましたが、

「——」

なんの返事も無いのは、ささぐまの夫婦も日照り続きで、かわうそのように川を下って、どっかへ仕事に行っているのでしょう……

でも、この春生まれたと聞いているささぐまの子はいないかと、横あなのおくまではいって行くと、三びきの子どもがのん気そうに、すやすや昼ねをしていました。

それで、目を覚まさせてはならないと思って、そのまま、そっと帰ろうと、あなの出口の上の、ささのくきに、ツキノワが前足をかけると……

ささの葉の下から三角頭のみむしが、黒味がゝかた茶色のうろこに、ぜにがたのはんてんのある長いからだを、うねうね無気味にうねらせて……

「上って来て見ろ——」

と、毒をふくんだきばを、ぐっとむき出して、今にも飛びつこうと待ちかまえていました。

「こりゃ、こまった——大きなみむしがいる——」

すると、その時、遠くの方から一羽のきじが、美しいつばさを、すうーっとすぼめて、ななめ横にまい下って来て、ささむらの向こうへ降りたかと思うと、いつの間にか、ささの葉の下をくぐり抜けて、みむしのうしろへそっと近づいて、ふいにみむしの首すじを、

「この、毒虫め」

とばかり、するどいつめ先で、ぐっと、ねじりつけるようにしてふみつけました。

みむしも、首すじをおさえつけられては、かま首をふり回すことが出来ないので、自まんの毒ばが、なんの役にも立ちません。

それで、まむしは、ぎらつく目で、下からきじをにらみつけて…………

「首を、おさえつけられても、金しぼりの術があるぞ——」

と、長いからだを細いしっぽの方から、ぎやくにからみついて、きじを羽根ごと、ぐるぐる巻きに巻きあげました。

だが、きじは、じいっと自分のからだへ、まむしの思うままに巻きつかせておいて…………

「もう、それでいいのか——」

そう念をおしたかと思うと、急にパツ！と一羽ばたき、緑に光るつばさを、力一ぱい大きく広げました。

すると、もうそこには、まむしのかげもすがたも見当たりません。まむしの長いからだは、ずたずたに切りさかれて、ちりちりばらばらに飛び散ってしまいました。

と、思うと、また、きじも油だんがなりません——最前から、向こう岸の松の木の上に、きじの、二倍ほども大きい大たかがねずみ色のつばさをたたんで、じいっと静かに、今に飛ぶか今に飛ぶかと、きじの飛び立つのをねらっていました。

で、それを感じたきじは、

「おやっ大たかが、ねらっているぞ——」

と、すぐ、首を地面にすりつけるようにして、自分の羽根色を同じ緑の草むらにかくれながら、しばらくは、羽ばたきの音も立てないようにつめ先で走って、今度は、大たかの大きいつばさでは、どうも飛ぶことの出来ないくぬぎ林の、木と木の間をぬうように低く飛んで逃げ出しました。

けれど、大たかも、するどい目と勘を持っているので、すぐ、きじの逃げ道を…………

「くぬぎ林の南へ逃げたな——」

そう、感じると、その手で逃げるならこの手で行くぞと、くぬぎ林の上をまっすぐに飛んで、きじの逃げ口へ先回りしました。

そして、林の下をぬけて来たきじの出っ鼻へ、パツ！と、上から飛びかかって行ったので逃げ場を失ったきじは、

「しまった——」

ちょっと、だじろぎでしたが、機びんにつばさをかわすと、すぐ一直線に大空へ、高くまい上がっていきました。

すると、ちょうどその時、

かりにかけては鳥一番のはやぶさが、はい色に赤味がかったつばさをはやめて、空の横合いから、はやてのように飛んで来て、きじと大たかの間へ、サツとわりこんで、大たかのつばさを、きしゅうの一げきで、

「えい！」

と、はげしくけたので、大たかは、

「ふい打ちは、ひきょうだぞ！」

そうさけぶと同時に、バサッバサッと、白い下ばらまで見せて、もんどり打ってよろめきました。

で、きじは、このはやぶさと大たかの一っき打ちの、そのすきに救われて、つばさをすぼめてななめ下へ一直線に、すーうっと、林の中へ降りてしまうと、羽尾音をしのばせていつの間にか、かけるようにして、滝つぼの岩かげまで逃げてしまいました。

五十日余り晴天が続いても、滝つぼの周囲だけは楽園で、峠に住む動物達にとっては、ここは命をつなぐ、たゞ一つの泉（オアシス）でありました。

いまだに、青々と水をたたえているこの滝つぼの水面では、おおみずすましやげんごろう、そして、みずぐものような小さい虫に至るまで、毎日水上ゲームを楽しむことが出来ました。またその水ぎわには、あおさぎやこさぎなどのなか間が、ここばかりに集まった川魚をとらえて、その日その日を気楽に送っていました。

そして、その付近の森や林の中から、つつどり、ひよどり、おおるりなど、小鳥の中でも歌の名手の、美しい声で合唱する山のコーラスが、毎日すずしい風に乗って流れて来ました。

それから、また、この滝つぼを取り巻くようにして、いろいろなけものなか間が、あちらこちらでそれぞれ、楽しい自分達のすを作っていました。その中で大きいけものと言えば、ジロツポ達野じかの家族と、裏山の古すに暮らしているきつね夫婦と、くぬぎ林に横あなをほって住んでいるたぬきの一族だけでありました。

そこで、きつねとたぬきは、よく人間をばかすと言われていますが、この山では……

「金太郎さんは、山でもきらわれ者の私達まで、みんな同じようにかわいがって下さるから——いくら、ばかそうと思っても、親切な人には、ばかしの術がかかりませんよ」

と、きつねが言いますと、たぬきも、また……

「そうですとも、そうですとも、私らも、いつも人間から、白い目で見られるきらわれ者のなか間ですが、金太郎さんだけには、大変かわいがられています……そのためでもありませんが、これでも、小鳥の卵をねらうへびや、畑を荒らす野ねずみを退治して、少しは世の中のために尽くしているつもりですが……」

と、相づちを打ちました。

そうです。きつねとたぬきの言うとおりで……人間からいたずらを仕かけないかぎり、きつねやたぬきの方から、悪だくみを仕かけてくるようなことはありません。

さて、話は、また変わって、そのころ、子じかのジロツポは、毎日のように滝つぼの横から、用水路のズイドウを通して、金太郎の家へ遊びに行きました。そしてジロツポは、いつも金太郎に……

「僕、ヤトやツキノワの所へ遊びに行きたいなア……」

と、ねだるのです。

だが、長い日照り続きで、畑の作物がかれそうになっているので、金太郎は、

「きょうも、畑へ、水あげをしなきゃならないから……」

と、子じか相手の、山遊びどころではありません。用水路に水車を作って、ガッタンコットン。ガッタンコットン、朝早くから夜おそくまで、畑の水上げ仕事にはげんでいました。

でも、この山にも、長い日照り続きも知らぬ顔で、毎日毎日のん気に昼寝ばかりしている者がありました。それば、滝つぼのすみっこの、どろの中に住んでいるどろがめの家族達でありました。

きょうも天気がよいので、親がめは、がけの上にはい上がって、カンカン照る日に甲らをほしていました。

が、とつ然、バシャンと水の飛ばしりが、半出しのねぼけ顔へかかったの、そと首をのぼし、じゃまくさそうにかた目を開いて見ると、サ、サ、サ、と、滝つぼの水面を走るように、さざ波が立って、パツと一勢に水鳥達が、バタバタ飛び立って行きました。

親がめは、また、ねむそうに首を甲らの中へ仕舞いながら……

「さざ波ぐらいに、バタバタさわいで——水鳥達は、あわたゞしくてこまったことだ——」

そう、つぶやいているすぐその後から、今度は、サーっと、森や林を大きく鳴らして、小じゅりまじりのはげしいあらしが、パラパラどろがめの甲らをたたきつけました。



それで、最前から、岩かげでつばさを休めていたきじも、羽根をあふられて思わず、大空をながめました。

すると、いつもとちがったいやな色の空を、大きな鳥がつばさを広げて飛んで行くように、真っ黒な流れ雲がいそがしく、北へ北へ飛んでいました。

で、きじは何か、おそろしいことが、今にも起こるような予感がして……………

「こんな日には、早く、すへ帰るにかぎる……………」

と、岩かげから、パッと飛び立ったものの、大たかや、はやぶさのしゅうげきにそなえて谷川の流れてにそって低く飛んで行きました。

が、ビュービュー吹く山あいの、風にさからっては、速力が思うように出せません……………で、思い切って大空へ、高く舞い上がって行くと、右の方に見える相模（さがみ）の海が、海神でも荒れくるっているようなひどいあらしで、山のような白波が高く波立って、ゴーゴー大空までも、海鳴りが聞こえて来るように感じられました。そして、すぐ目の下の山や谷を見ると、森も林も草むらも、はげしいあらしにあふられて、ちょうど緑の波が、大きく波打っているように見えました。

そして、その時、ひのき山から……………

「あっ煙だ！赤い花の悪まだ！」

ときじは、おそろしそうにさげびました。

それは、長い間の晴天で、かわき切ったひのきの枝と枝とが、風のためにはげしくすれ合って、自然に火を吹き出したためでしょう。

きじは、たびたび起る山火事のおそろしいことをよく知っていました。山の何物をも残さないで焼きつくしてしまう山火事は、山の動物達にとっても、一番おそろしい悪まです。そして、ふと、去年、ひな鳥をいだいたまま、すの中で焼け死んだ山鳥の母親のことを思い出して、急に、森のすに残した家族のことが、心配で心配で、はげしいあらしの中で、ぐんぐんつばさを速めました。

ちょうど、そのころ……………

子うさぎ、いや今は、もうりっぱなおとなの野うさぎになっていたヤトが、弟うさぎ達を連れて、ひのき山のふもとで夏草をつんでいましたが、パチパチ自分達の方へ、もえ広がって来る山火事に気づいて、口々に……………

「赤い花の悪まだ！」

「逃げろ、逃げろ！」

「となり山へ逃げろ！」

弟うさぎ達は、うさぎの習性で、すぐ、山へ山へ、となり山へ逃げようとしていました。

が、ヤトは、火の手は、いつも上へ上へと、もえ広がることを知っていたので、やがてとなり山へも火事に移るだろうと、ピョンピョン弟うさぎ達よりも、先に山へかけ登って……………

「山へ登っては危ない！道を横にとって、下へ下へ逃げるんだ……………」

と、大声にそうさげびながら、弟うさぎ達の登って来るのを、みんな下へ降ろしてやろうと、けん命になってさえぎりました。

だが、火の手が、下の方から追っかけるようにもえ上がって来るので、弟うさぎ達は、何をじゃまするのだと言ったように……………

「でも、赤い花の悪まが、下から追っかけて来る……………」

と、ほのおをおそれて、どうしても、山から降りようとはしません。

で、可愛いそうだと思いましたが、ヤトは、

「聞き入れ無い者は、けり飛ばして、赤い花の悪まに食わしてしまうぞ！」  
と、どなって、こわい顔してけり落とすぞと言ったように見がまえました。

これには、弟うさぎ達も、仕方なさそうに、しぶしぶ一羽、二羽と、みんな火の粉の下を、まろびつころげつして、山の中ほどから、下へ下へ逃げて行きました。

が、まだ、うさぎの習性で、上へ上へ——山へ逃げようとする弟うさぎもいるので、ヤトは、頭の上から火の粉をあびながらも、長い間、となり山にがん張って見張っていました。